

ドイツにおける大学ランキング

—Times Higher Education 世界大学ランキングの結果

向上に向けたプロジェクトの事例紹介を中心に—

ボン研究連絡センター

佐々木 清和

1. はじめに

日本では、世界大学ランキングは年々その存在感を増している。2015年に発表された各ランキングにおいては、国内上位大学の順位が前年より低下（詳細は第2章参照）したことで、「東大、アジア首位から転落¹⁾」といった記事が注目を集め、同時に、評価指標のひとつである「国際性」の低さが指摘されるとともに、各大学の自助努力に期待する論調も見受けられる。

これらのランキングにおける得点の算出方法及び得点の算出に使用されるデータベース等は年々変化しており、前年からの順位や得点の低下が大学としての教育・研究力の低下を直接意味するとは考えにくい。そのため、ランキング結果を鵜呑みにすることの問題点が指摘され続けているが、一方で、その注目度は高く、世界各国からの優秀な学生や研究者の獲得という視点から、ランキングを無視し続けることは難しい現状である。

さらに、日本は、平成25年5月17日の成長戦略第2弾スピーチにおいて総理大臣の口より「今後10年で、世界大学ランキングトップ100に10校ランクインを目指す²⁾」旨が語られたように、国家として、国内大学全体の国際的地位の底上げを目標として掲げている。しかしながら、各大学が協力し、国際的地位向上に向けた取組やノウハウを共有する動きは、現時点では限定的である³⁾。

一方、ドイツでは、「ランキングをめぐる議論は他国と比較するとあまり盛んではない」⁴⁾状況にもかかわらず、英国高等教育専門誌 **Times Higher Education** による世界大学ランキング（以降 **THE** ランキング）2015年度版におけるドイツの上位校の順位を見ると、ハイデルベルク大学は前年の70位から37位、ミュンヘン工科大学は前年の98位から53位と、大きく順位を向上させている。（一方、日本で最上位の東京大学は、前年の23位から43位に順位を落としている。）

本報告書は、上記の状況をもたらしたドイツの取組について紹介するとともに、ドイツにおける大学ランキングに関する概況を報告し、今後日本においてランキングとの「付き合い方」について検討する方々の参考材料となることを目的としている。ドイツは、非英語圏であること、また、ランキングにおいて上位を独占している英国及び米国とは異なる高等教育システムを保持するという点で日本との共通点が多いため、実際に成果を上げている取組からは現実的かつ重要なエッセンスを多く学べると考えられる。

¹ 朝日新聞デジタル（2015年10月2日） <http://www.asahi.com/articles/ASHB16G3KHB1UHBI021.html>
（2016年1月20日アクセス）

² 首相官邸ホームページ 平成25年5月17日安倍総理「成長戦略第2弾スピーチ」（日本アカデミア）
http://www.kantei.go.jp/jp/96_abe/statement/2013/0517speech.html （2016年1月20日アクセス）

³ 大学及び研究機関間のネットワークが主体となり、ランキング指標のより適切な運用等についてランキング実施主体に申し入れを行った事例としては、大学研究力強化ネットワーク・大学ランキング指標タスクフォースによる提言「**Times Higher Education** 世界大学ランキングに関する申し入れについて —ランキング指標のより適切な運用と理解を目指した要望—」が挙げられる。<https://www.runetwork.jp/activity/detail.php?id=14>（2016年2月5日アクセス）

⁴ ドイツ大学長会議（以降 HRK）国際部長 Marijke Wahlers 氏インタビューより。

2. 世界大学ランキングをめぐる状況の日独比較

2-1. 世界大学ランキングの概要

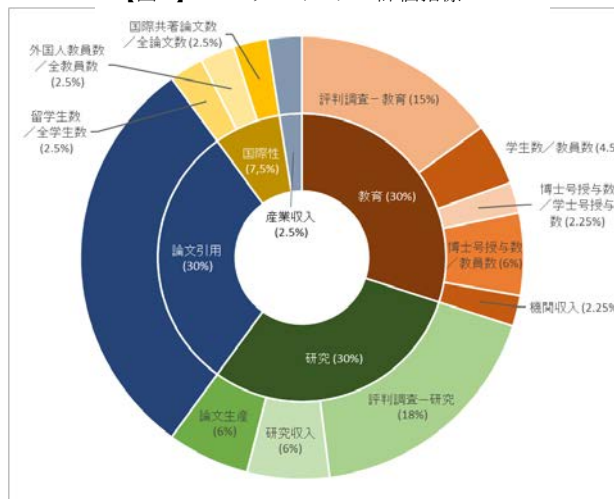
本報告書では、日本のメディアに最も頻繁に取り上げられるランキングである THE ランキングと、同じく英国企業の Quacquarelli Symonds 社による世界大学ランキング（以降 QS ランキング）について言及する⁵。

まず、上記の 2 つのランキングの概要、特に評価指標について簡潔に報告する⁶。

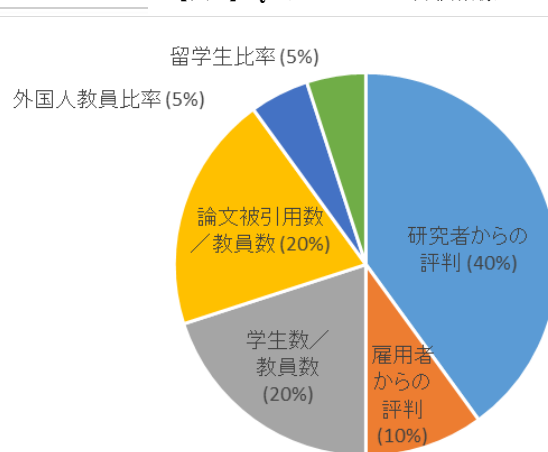
THE ランキングは、2010 年より現在の形で発表されており（それ以前は QS 社と合同）、最新版のランキング（2015 年版）の評価指標（括弧内は得点比重）は、教育（30%）、研究（30%）、論文引用（30%）、国際性（7.5%）、産業収入（2.5%）から成り、それぞれの指標内にさらに細分化された指標が存在する（図 17）。これらの得点比重に基づき、それぞれの指標で最高の評価を得た大学が 100 点になるよう得点が算出され、その他の大学は、指標ごとの得点を加重平均して総合点を算出し、順位付けがなされる。なお、指標の定義や使用データ等が年々変化するため、過去のランキング結果との比較があまり意味をなさない旨、公式ホームページにも言及されている。

QS ランキングは、同じく 2010 年より現在の形で発表されており、最新版のランキングの得点は研究者からの評判（40%）、雇用者からの評判（10%）、学生数／教員数（20%）、論文被引用数／教員数（20%）、外国人教員比率（5%）、留学生比率（5%）の 6 つの評価指標により構成される（図 2）。

【図 1】 THE ランキングの評価指標



【図 2】 QS ランキングの評価指標



⁵ 他の主要な世界大学ランキングとしては、上海交通大学によるランキング、U-Multirank 等が挙げられるが、前者は評価指標にノーベル賞受賞者数等を含むなど、各大学等の努力により結果を向上させることが容易ではないと考えられること、後者は第 1 回目の結果公表が 2014 年と歴史が浅く、さらに他ランキングと大きく性質が異なることから、その他のランキングや総合ランキング以外のもの（分野別ランキング、エリア別ランキング等）と同様、本報告書の対象からは除外した。

⁶ 評価指標の定義等、詳細な情報は Times Higher Education ホームページ

<https://www.timeshighereducation.com/news/ranking-methodology-2016> 及び QS 社ホームページ

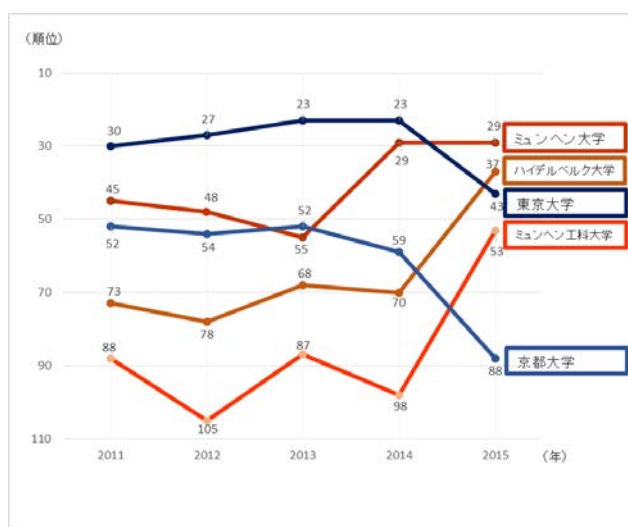
<http://www.topuniversities.com/university-rankings-articles/world-university-rankings/qs-world-university-rankings-methodology> を参照。（いずれも 2016 年 2 月 5 日アクセス）

⁷ 本稿で使用する図は、すべて公表情報をもとに筆者が作成したものである。

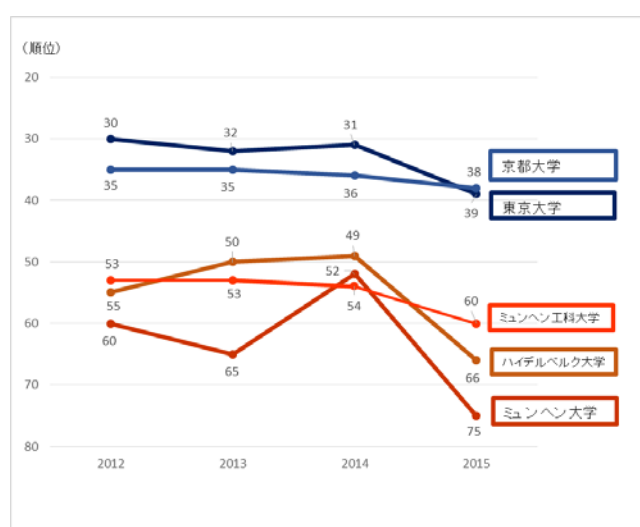
2-2. 世界大学ランキング結果の日独比較

2つのランキングについて、日独の上位大学の順位の推移を比較する⁸。THE ランキング（図3）においては、ドイツの各大学の順位が飛躍的に向上している一方、日本の2大学は直近のランキングで大きく順位を落としていることが読み取れる。また、QS ランキング（図4）においては、日独ともに THE ランキングと比較すると変化は大きくないが、いずれも直近のランキングでは順位を落としていることがわかる。

【図3】 THE ランキングにおける各大学順位の推移



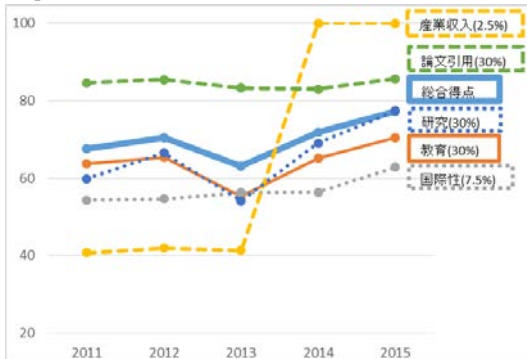
【図4】 QS ランキングにおける各大学順位の推移



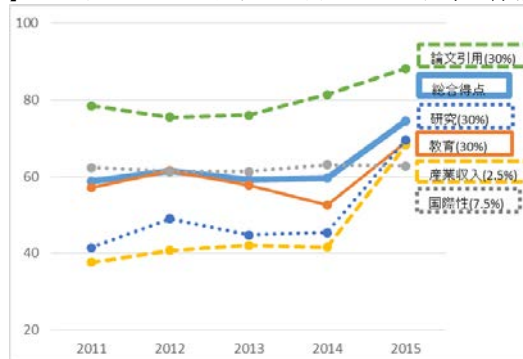
続いて、各大学の指標ごとの得点の推移を比較する。

THE ランキングにおいては、上述のとおりドイツの各大学の順位が上昇しているが、特に2014年から2015年にかけては、ここに挙げた3大学のほぼ全ての評価指標について、得点が上昇している（図5～図7）。中でも、得点比重が全体の30%を占める「研究」の得点が大きく上昇しており、このことが順位の向上に直結していると推測される。また、得点比重が2.5%と小さいものの、2014年から2015年にかけて「産業収入」の伸び率は非常に大きく、特にミュンヘン工科大学では44.9から99.2と、倍以上に増加した。

【図5】 THE ランキングにおけるミュンヘン大学の得点推移

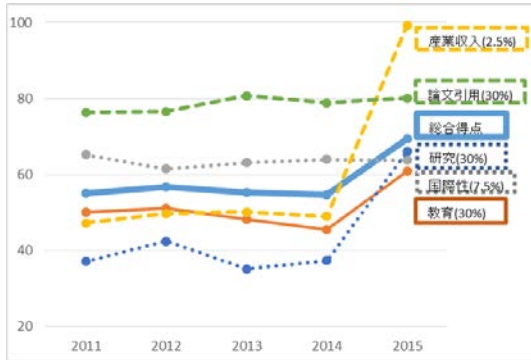


【図6】 THE ランキングにおけるハイデルベルク大学の得点推移

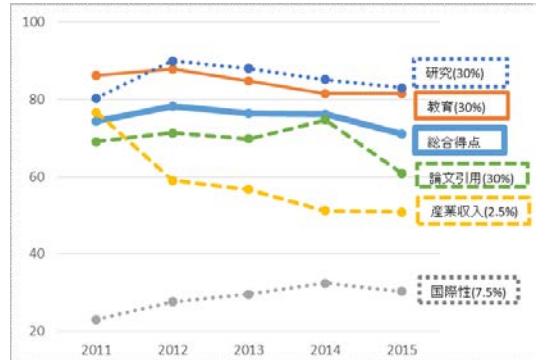


⁸ THE と QS のいずれのランキングにおいても比較的上位に位置する大学を選定したもので、選定した大学が「ドイツのトップ3」という意図ではない。日本の大学については、両ランキングで概ね100以内に位置していた2大学のみを取り上げた。

【図 7】 THE ランキングにおけるミュンヘン工科大学の得点推移



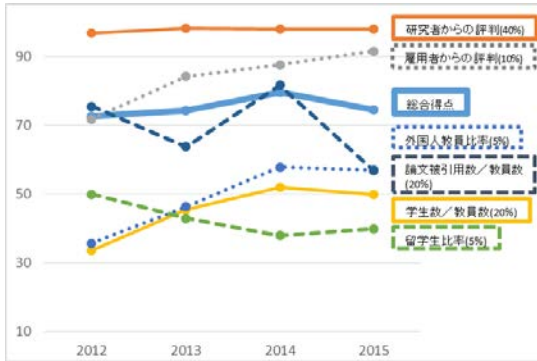
【図 8】 THE ランキングにおける東京大学の得点推移



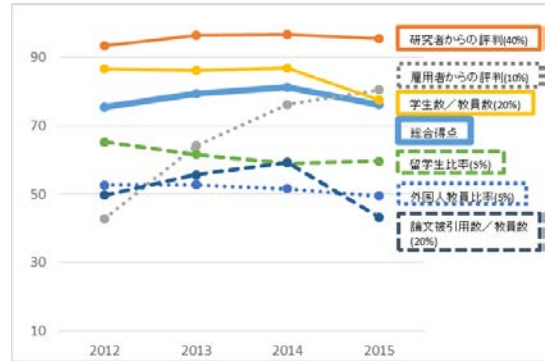
一方、日本の大学で最上位に位置している東京大学の得点（図 8）は、すべての指標について急激な変化はないが、2014 年から 2015 年にかけては得点が微減している指標が多い。中でも、「論文引用」は 74.7 から 60.9 と、比較的大きく点数を下げている、このことが総合得点及び順位の低下につながっていると考えられる。

続いて QS ランキングにおける得点の推移を同様に比較すると、THE ランキングと比較して得点の変化は小さく、2014 年から 2015 年にかけてはどちらかと言えば全体的に微減している（図 9～図 12⁹）。特徴的なのは、ミュンヘン工科大学以外の 3 大学で「論文被引用数」の得点が 10 点以上下がっており、このことが順位の低下の大きな要因となっていると考えられる。

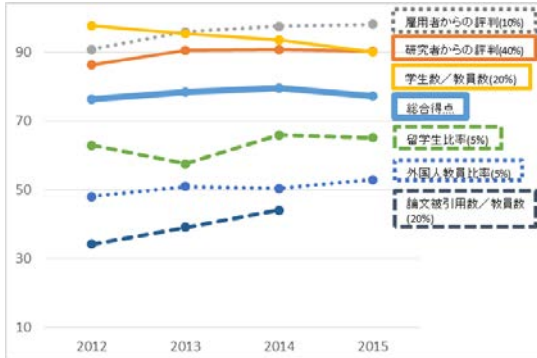
【図 9】 QS ランキングにおけるミュンヘン大学の得点推移



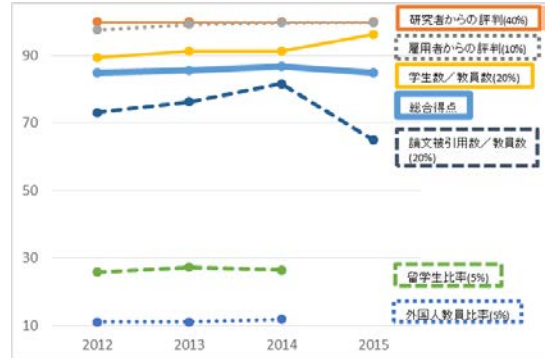
【図 10】 QS ランキングにおけるハイデルベルク大学の得点推移



【図 11】 QS ランキングにおけるミュンヘン工科大学の得点推移



【図 12】 QS ランキングにおける東京大学の得点推移



⁹ 2015 年版 QS ランキングにおいて、ミュンヘン工科大学の「論文被引用数/教員数」、東京大学の「外国人教員比率」及び「留學生比率」データは非公表
<http://www.topuniversities.com/universities/technische-universit%C3%A4t-m%C3%BCnchen#wur> (2016 年 2 月 5 日アクセス)、<http://www.topuniversities.com/universities/university-tokyo#wur> (同上)

3. THE ランキングの結果向上に向けたプロジェクト

3-1. プロジェクトの概要

前章のとおり、ドイツの各大学において、2014年から2015年にかけてのTHEランキングの得点及び順位の伸び率がかなり際立っている。さらに言うと、2014年には200位以内にランクインするドイツの大学は12校だったが、2015年には20校に増加しており、ドイツ国内での急激な底上げが進んだと言えるだろう。

この要因となったと思われるのが、ドイツの高等教育機関全体を巻きこんで行われたプロジェクト「ドイツの高等教育機関の世界大学ランキング結果の向上—ドイツにおける国際的な教育マーケティングのために、ドレスデン工科大学とテュービンゲン大学が先駆者に—」である。

これは、2013年5月から2015年4月にかけて、ドイツ外務省の経済的支援により上記2大学が実施したプロジェクトで、まず2大学内に設けられたプロジェクトチームがTHEランキングの指標等を分析し、そこから導き出された改善策を国内の大学と共有することで、ドイツの高等教育機関全体のランキング結果を向上させることを目的としている。

3-2. プロジェクト誕生の背景及び経緯

ドレスデン工科大学において実際にプロジェクトを担当したコーディネーターSusanne Raeder氏によると、「ドイツでは日本と同様、世界大学ランキングにおいて自国の高等教育機関が正当に評価されていないという認識が各機関に共有されており、かつては、英国企業主導によるアングロサクソンシステムである以上仕方がない、という論調が中心だった」とのことである。

Raeder氏の言葉通り、ドイツには、世界大学ランキング上では不利に働くと思われる条件が複数存在する。

まず、「ドイツでは学術研究の大きな部分は、マックス・プランク研究所のような大学外の機関で行われる¹⁰」ため、大学ランキングという土俵ではドイツの学術レベルの高さが現れにくいこと、さらに、「大学間の格差がきわめて小さく、威信構造も全くフラットにできている¹¹」と指摘されるように、いくつかのトップ大学が強大な力を誇っている構造ではなく、各地域に優れた大学が複数存在する構造¹²のため、ランキングの上位には登場しにくいことが挙げられる。また、分野によっては論文での英語使用率がそう高くない分野もあるため、論文被引用数等の数値データで不利になる可能性も否定できないだろう。

¹⁰ ウルリッヒ タイヒラー (2010)「ドイツ高等教育の変貌」金子元久訳、『IDE 現代の高等教育』No.518 (揺れる世界の大学), pp.14-18, IDE 大学協会、p.16

¹¹ 同 p.16

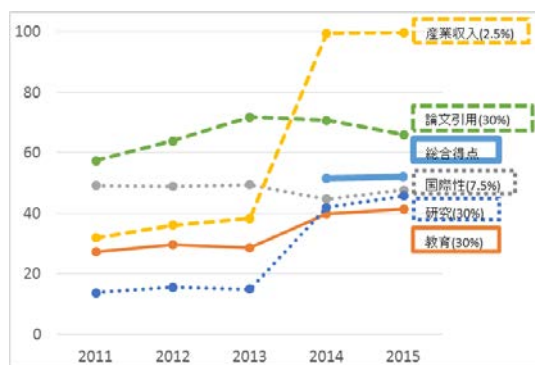
¹² 政治レベルでも同様で、ドイツでは連邦政府と同様、州政府が強大な力を握っている。HRKのWahlers氏によると、こうした背景から、日本のように、「今後何年でトップ100に何校、といった目標が国として設定されることは考えにくい」とのことである。

さらに、前述のとおり、ドイツではランキングをめぐる議論がさほど活発ではなかったため、本プロジェクト以前にはこうした国家的なプロジェクトは存在していなかった。その要因としては、HRKのWahlers氏によると、ドイツの高等教育機関は「プロモーション活動やランキングの分析に労力を割き大学の質が低下してはまったく本末転倒で、本質を磨くことが重要」と思考する傾向が強いことや、「高等教育については、エクセレンス・イニシアティブ¹³など、別のテーマで活発な議論が行われており、ランキングは優先的な議題に成りえない」こと、さらに、「ランキングが話題になるとしても、分野別に特化した国内ランキング（詳細後述）に議論が集中していた」ことが挙げられる。

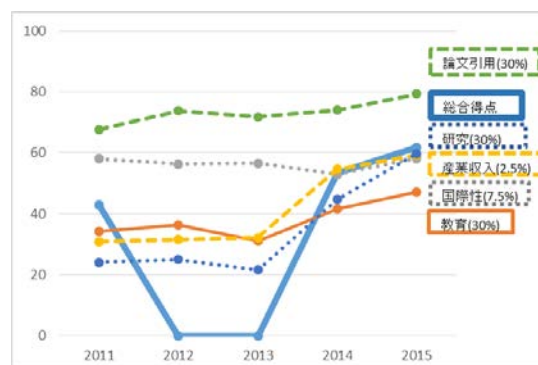
しかし、近年、ドイツ国内での世界大学ランキングへの注目度は日本と同様に上昇しており、ドイツ外務省内で国内の高等教育機関が国外でも適切に評価されるべきという議論が盛んだったため、同省とドレスデン工科大学の協議¹⁴の結果、まずは同大学とテュービンゲン大学¹⁵において、ランキングの評価指標やデータの取扱いについて詳細に分析するプロジェクトチームが発足した。

プロジェクトは、まず2大学が先駆者となり、2014年版のTHEランキングに向けた分析を行うことから始まり、実際に2014年版で結果が大きく向上した（図13、図14）¹⁶ことを受け、2015年3月にHRKを通じてそのノウハウをドイツ国内の各大学（HRK加盟校）に周知、その後、2015年4月30日付で報告書がまとめられた、という流れで進行した。2大学以外の大学は、2015年版のランキング用のデータ提供時に、2大学より共有されたノウハウを駆使し、その結果が2015年10月に発表されたランキングに反映されている。

【図13】 THEランキングにおけるドレスデン工科大学の得点推移



【図14】 THEランキングにおけるテュービンゲン大学の得点推移



¹³ トップレベルの大学への大規模助成プログラム。詳細は

http://www-overseas-news.jsps.go.jp/wp/wp-content/uploads/2015/06/2014countryreport_03bon.pdf (2016年2月10日アクセス) 及び http://www.dfg.de/en/research_funding/programmes/excellence_initiative/index.html (同上) を参照。

¹⁴ ドイツ外務省の担当者によると、「外務省が高等教育機関に財政的支援を行うことは極めて稀だが、省内での議論の高まりを受けて同大学との個別の協議を重ね、本プロジェクトの構想を固めた」とのことで、ドイツの外交政策上、学術外交が重要視されていることの表れとも考えられる。なお、HRKのWahlers氏によると、日本の文部科学省にあたるドイツ連邦教育研究省は、「本プロジェクトにはほとんど関与していない」とのことである。

¹⁵ ドレスデン工科大学のRaeder氏によると、ドレスデン工科大学のパートナーとしてテュービンゲン大学が選出されたのは、「強みとなる分野の違い（前者は工学系、後者は特に人文社会系に強いとされている）や地域（前者は旧東独地域、後者は旧西独地域）」といったバランスが考慮された」とのことである。

¹⁶ 2014年以前のドレスデン工科大学の総合得点、2012年及び2013年のテュービンゲン大学の総合得点は非公表。

<https://www.timeshighereducation.com/world-university-rankings/technische-universitat-dresden?ranking-dataset=1072>、<https://www.timeshighereducation.com/world-university-rankings/eberhard-karls-universitat-tubingen?ranking-dataset=1072> (いずれも(2016年2月12日アクセス))

なお、HRK は、プロジェクトについて各大学へのアンケート¹⁷を実施し、その結果等を定例会議において各大学と共有するなど、外務省と連携しながらプロジェクトに係る重要な役割を果たしている。HRK の Wahlers 氏は、「ランキングの特徴を明確にし、ランキングからは何がわかるか、また、ランキングの何が問題なのか、その実態をクリアにすることが、HRK の役割」と述べている。

3-3. プロジェクトにより導き出された改善策の概観

本プロジェクトの報告書はドイツ国内大学以外には非公表とされており、本報告書では中身について詳細に言及することができないが、公表情報及び関係者からの聞き取りをもとに、プロジェクトの成果について簡潔に報告する。

そもそも、THE ランキングは、大まかに言うと①各大学が提供する数値データ、②学術論文データベース¹⁸のデータ、③評判調査による調査結果の3要素をもとに作成されている。

まず、ランキング結果を向上させるにあたり最も即効性が期待される対応のひとつは、①各大学が提供する数値データ（教員数、学生数、機関収入等）について、指標の定義を明確に把握し、誤った認識に基づいたデータ提供を行わないよう、細心の注意を払うことだと思われる。実際に、自大学の得点が飛躍的に向上した要因は、こうした取組によるものと、ドレスデン工科大学の Hans Müller-Steinhagen 学術担当理事は指摘している¹⁹。

ドイツと日本では、問題となりうる数値データの種類やその問題の度合いは異なることと思われるが、THE の求める数値データの定義を確認²⁰し、その情報をガイドラインとして国内全体に周知したことが多くの大学のランキング結果の向上につながった、という取組の流れそのものは、日本にとっても大いに参考となるものと思われる。

また、ドレスデン工科大学の Raeder 氏は、②学術論文データベースのデータについて、自らの大学の正式名称のみならず、その他使用されることが想定される名称を洗い出し、その全てをデータベース運営会社（トムソン・ロイター社及びエルゼビア社）に届け出ることの重要性を指摘している。届出によりその大学としてカウントされる名称が複数登録されることで、評価指標「論文引用（得点比重 30%）」における取りこぼしが減るといふこの指摘は、特に名称を間違えられることの多い非英語圏の大学等では重要なものと推測される。実際に、Raeder 氏がドレスデン工科大学のデータを洗い出したところ、「驚くべき割合で、誤った名称が使用されているケースや単純なスペルミスがあるケースが見受けられ、そのためにデータベース上では適切にカウン

¹⁷ 各大学に対し、ノウハウがどの程度役に立ったか、今後どのような分析が望まれるか等を調査したものの。

¹⁸ 2014年まではトムソン・ロイター社の Web of Science、2015年はエルゼビア社の Scopus を使用。Raeder 氏によると、「ドレスデン工科大学の THE ランキングの評価指標「論文引用」において2015年の得点が伸び悩んだのは、このデータベース変更が大きな要因と思われる」とのこと。

¹⁹ <https://www.timeshighereducation.com/world-university-rankings/2014-15/world-ranking/analysis/were-taking-a-long-hard-look-at-ourselves> (2016年2月22日アクセス)

²⁰ ドレスデン工科大学の Raeder 氏は「指標の確認等のために、かなり頻繁に THE ランキングの担当者とコンタクトをとった。担当者は大学からの問合せを歓迎しており、大学にとって有益な情報を提供してくれる」とのことである。疑問点が生じた場合、積極的に THE に問い合わせるのはよい方法と思われる。

トされていなかった」とのことだった。

以上のように、各大学が提供する数値データの見直しやデータベースにおける名称の登録は、ひとつひとつは非常にささいな取組のようにも思われるが、「これらの小さなことの積み重ねが、ランキングの結果には大きな変化をもたらした」と Raeder 氏が語るように、ランキング結果の向上という目的を達成するには、このように評価指標と向き合い、自らにとって不利となる要素を排除していくことは、非常に有効な方法だと考えられる。

さらに、ドイツでは、③評判調査による調査結果を向上させるために、大学の本質的な価値を高めていくことと並び、戦略的なブランディング戦略の必要性を指摘する声が挙がっている。

ドレスデン工科大学の Raeder 氏は、ブランディングの重要性を認識したうえで、「ドイツの大学の多くは公立で、アメリカの多くのトップ大学のようにブランディングに経費を割くのが難しい」と指摘している。また、HRK の Wahlers 氏は、「ドイツの大学がプロモーションを行う際は、漠然と大学全体を宣伝するのではなく、対象者や対象分野等を明確にし、何のためにブランディングを行いたいのかを明確にする傾向がある」と述べた上で、「現状、ドイツの大学で上手にブランディングできている大学は少なく²¹、例えばホームページの充実など、全体として改善の余地はあるかもしれない」と、ドイツの高等教育全体の国際的地位のさらなる向上に向けて、次のステップに言及している。

4. ドイツ国内の他のランキング

ドイツ国内には、上記の世界大学ランキングが存在感を増す以前から、国内の高等教育機関・研究機関を評価・比較する枠組みが存在していた。

中でも、高等教育開発センター（以降 CHE）により 1998 年より毎年発表されているランキング²²は、ドイツ国内での存在感が大きく、HRK の Wahlers 氏によると、「世界大学ランキングとは異なり分野別に特化したランキングであり、全機関に関わる政治的議論を呼び起こすものではなく、研究者や学生のニーズに役立つものであり、ユーザーが望む情報を獲得するための現実的な選択肢として、ドイツ国内で一定の信頼を得ている」とのことである。

CHE によるランキングは、まずユーザーが分野を選択することで、その分野について、ドイツ国内の高等教育機関の現況を展望できる点が特徴的であり、全機関から複数の機関を選択し、その現況をリスト化して比較検討することができる。このランキングから把握できるデータは多岐に渡り、論文数のような研究実績から構内の学習環境に至るまで、20 を超える指標が存在する。また、明確な順位付けがなされるのではなく、各指標の得点が 3 段階のグループ（上・中・下）ごとに仕分けされていることも、世界大学ランキングとは異なる点である。さらに、大学の所在地に係る情報も充実しており、家賃等の住環境についても比較することができるため、特に学生

²¹ ブランディングに成功しているドイツの大学の一例として、HRK の Wahlers 氏はミュンヘン工科大学やベルリン自由大学を挙げている。

²² <http://www.che-ranking.de/cms/?getObject=2&getLang=de>（2016 年 2 月 5 日アクセス）

が志望大学を決定する際に、非常に有意義なランキングだと思われる。

また、ドイツ学術審議会 (Wissenschaftsrat) による「Forschungsrating (Research Rating) ²³」は、「ドイツの研究をめぐる質的・量的状況をかなり詳細に把握することができるもので、研究者には広く受け入れられている。世界大学ランキングのカウンター的存在として、有意義なもの」と HRK の Wahlers 氏が語るとおり、分野ごとの研究をめぐる状況を一望できるもので、これまでに化学、社会学、電子・情報工学、英米文学の 4 分野のランキングが発表されている。CHE によるランキングと同様、明確な順位付けがなされるのではなく、研究の質や知識移転といった複数の指標について、5 段階のグループごとに仕分けされているが、CHE のランキングとは異なり、高等教育機関以外の研究機関（マックス・プランク研究所など）も対象となっている点特徴的である。このランキングについては、HRK の総会が全分野への拡大を求める勧告 ²⁴ を発出しており、今後の展開が注目される。

他にも、ドイツ研究振興協会 (DFG) は数年に一度「Förderatlas²⁵」を発表し、ドイツ国内での助成状況について、助成機関別や分野別といった様々な観点からとりまとめており、ドイツ国内での研究資金の流れを理解する上で有意義なものとなっているほか、フンボルト財団 (AvH) は数年に一度「フンボルトランキング ²⁶」として、当該財団の助成金によってドイツに滞在した外国人研究者の受入機関を、受入人数順にランキング形式で発表することにより、各機関の国際的な流動性を示している。

5. おわりに

日本は、第 3 章で言及したプロジェクトや第 4 章で報告したドイツの大学ランキングから、どのようなことを学べるだろうか。

筆者は、ドイツの大学が、それぞれにライバル関係にありながらも、外務省と HRK の支援のもとで情報を共有し、国全体として国際的地位の向上を目指したという姿勢そのものが、まず日本に求められているのではないかと考えた。日本の大学は、日頃から競争が求められる傾向にあるため、誰かが取りまとめない限り、国内他大学にとっても有利にはたらく情報をあえて積極的に共有することは難しいようにも思われる。そのため、文部科学省等の省庁は、経済的支援だけでなく、ドイツにおける HRK のような、国内の大学を取りまとめ、情報共有の場を提供する、といった役割をより強化していく必要があるのではないだろうか。

上記の点を踏まえた上で、日本においても、世界大学ランキングの評価指標等を分析するプロジェクトを立ち上げることは、大きな意味があるのではないかと考えた。分析を通じて、ランキングの問題点や特徴を理解することで、例えば「国際性を高めるために外国人教員を呼び込めば

²³ <http://www.wissenschaftsrat.de/en/fields-of-activity/research-rating/start.html> (2016年2月5日アクセス)

²⁴ <http://www.hrk.de/positionen/gesamtliste-beschluesse/position/convention/zum-forschungsrating-des-wissenschaftsrates/> (2016年2月5日アクセス)

²⁵ <http://www.dfg.de/sites/foerderatlas2015/> (2016年2月5日アクセス)

²⁶ <https://www.humboldt-foundation.de/web/humboldt-rankings-2014.html> (2016年2月5日アクセス)

よいのでは」といった漠然とした議論から脱し、現実的に、日本の大学が適切に評価されるための道筋を見つけることが可能となるとともに、日本にとって不利となる評価指標については、公式に異議を申し立てることも可能となるだろう。さらに、ドイツと日本では高等教育システムが異なるため、ドイツとは異なる数値データによって不利益を被っている可能性が否定できないとともに、大学名が学術論文データベース上で適切にカウントされないケースや、日本の論文誌がデータベースに登録されていないケースなど、多くの可能性が想像される。

また、第4章で報告したとおり、世界大学ランキングと並存する形で、研究者や学生から一定の評価を得ている国内ランキングが多数存在することはドイツの強みであり、日本においても、世界大学ランキングのみを追従するのではなく、多角的な視点から大学を評価する動きが高まることで、各大学の強み・特色の客観的な評価や、研究者・学生の個別のニーズに対応した現実的な所属選択など、多くの場面でプラスに働くように思われる。

もちろん、日本の教育研究力そのものを高め、論文被引用数等を飛躍的に向上させることができればそれに越したことはないが、大学ランキングと向き合い、国としての対応を検討することは、国際的地位向上への第一歩としてリーズナブルな選択肢ではないだろうか。

なお、ドイツにおける THE ランキングの結果向上に向けたプロジェクトの後継として、外務省を中心に新たなプロジェクトが検討されているが、2016年2月現在、目立った動きは見られない。外務省の担当者によると、次は QS ランキングに係るプロジェクトが検討されているとのことで、今後もその動向は注目すべきだろう。

謝辞

本稿の執筆にあたり、お忙しいスケジュールの中インタビューにご協力いただいた HRK の Wahlers 氏及びドレスデン工科大学の Raeder 氏、ご指導・ご助言いただいた日本学術振興会ボン研究連絡センターの皆様、日本学術振興会本部及び東京大学の皆様に深く御礼を申し上げます。

参考文献

- ・ウルリッヒ、タイヒラー (2010)「ドイツ高等教育の変貌」金子元久訳、『IDE 現代の高等教育』No.518 (揺れる世界の大学), pp.14-18, IDE 大学協会
- ・米澤彰純 (2012)「グローバル化と世界大学ランキング」, 『IDE 現代の高等教育』No.540 (大学にとってのグローバル化), pp.22-28, IDE 大学協会

主なホームページ (アクセス日は脚注を参照)

- ・Times Higher Education <https://www.timeshighereducation.com/>
- ・Quacquarelli Symonds <http://www.topuniversities.com/university-rankings>
- ・高等教育開発センター (CHE) <http://www.che-ranking.de/cms/?getObject=2&getLang=de>
- ・大学研究力強化ネットワーク <http://www.runetwork.jp/>
- ・ドイツ学術審議会 (WR) <http://www.wissenschaftsrat.de/home.html>

- ドイツ研究振興協会 (DFG) <http://www.dfg.de/>
- ドイツ大学長会議 (HRK) <http://www.hrk.de/>
- ドレスデン工科大学 <https://tu-dresden.de/en>
- フンボルト財団 (AvH) <https://www.humboldt-foundation.de/web/start.html>